# 小金井の湧水点 part 4

## ☆⑦ 質屋の出水　前原町３－40

**西之台遺跡水源地**

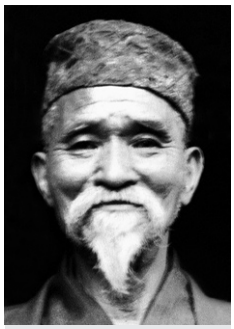
質屋坂の別名は湧水点を表す古語「かま」をそのままに用いた「かま坂」で、この「かま」から湧き出していたのが質屋の出水です。「出水」とはいえ季節による間欠的な湧水ではなく、明治期に水車の原動力となっていたことからも分かるように常時水が湧いていました。質屋坂の名は坂の途中にある星野家（前原町３―40―13）が一時期、質屋を営んでいたことに由来しますが、地元の人には質屋ではなく小金井神社宮司の星野治衛（ほしの じえ）さん宅といった方が分かりやすいでしょう。明治25年、治衛さんの曽祖父 星野治右衛門（ほしの じえもん）が水車を設置、明治40年、治衛さんの祖父 星野治亮（ほしの じすけ）の代で廃業しています。この水車の水輪の直径は１丈２尺（約３m64cm）、平太坂の梶家の水車が２丈２尺あったのに比べれば１丈小さく、小規模なものであったことがうかがえます。この水車の側板（水輪側面の板）のひとつと思われる板が「静観」と揮毫されて、現在小金井神社の拝殿に飾られています。実際に採寸させていただき曲率から水輪径を概算したところ１丈２尺よりも大きく、残念ながら星野家の水車の側板とする確かな裏付けとはなりませんでした。

「静観」の文字を揮毫したのは海軍中将 岩村俊武。大正10年に退役後、一時的に故郷高知県宿毛に帰ったのち、早々と小金井に移住しています。移住当初から小金井を第二の故郷として根付く気が満々なのは、日露戦争旅順攻囲戦で携帯した地図入れと旅順開城規約調印で用いたペンを、大正11年に鎮守の小金井神社に奉納していることからも分かります。ちなみに岩村中将が逝去したのは戦中の昭和18年11月９日。前原坂上交差点にあった小金井郵便局の東隣の自宅（1420番）で亡くなり、11日には告別式が執り行われています。

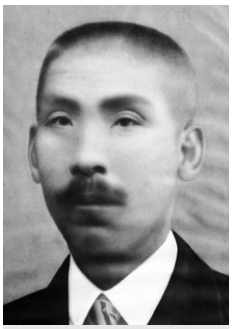
さてこの質屋の出水は正確にはどこから湧き出ていたのでしょうか。質屋の出水は武蔵野台地最古級の遺跡である西之台遺跡の水源地で、旧石器・縄文時代から生活用水として利用されていました。その湧水点は現在の小金井スカイコーポラス周辺に違いありません。ただし明治以降の地図でもう少し位置を絞り込めるはずです。そこで時代順に湧水点の正確な場所と利用法を辿ってみます。

「静観」額
大正13年（1924）　岩村俊武 奉納
小金井神社拝殿

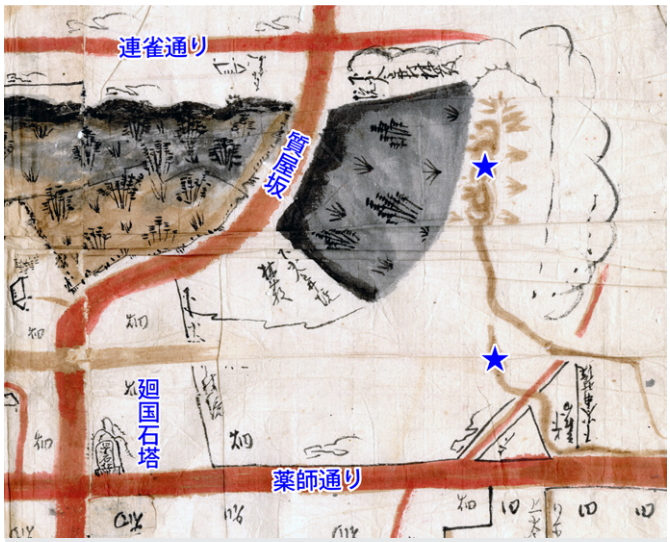
小金井神社 社号標柱
昭和17年（1942）９月建立
海軍中将 岩村俊武 謹書



海軍中将
**岩村俊武**
（1866～1943）



第11代小金井村村長
**星野治亮**
（1882～1969）

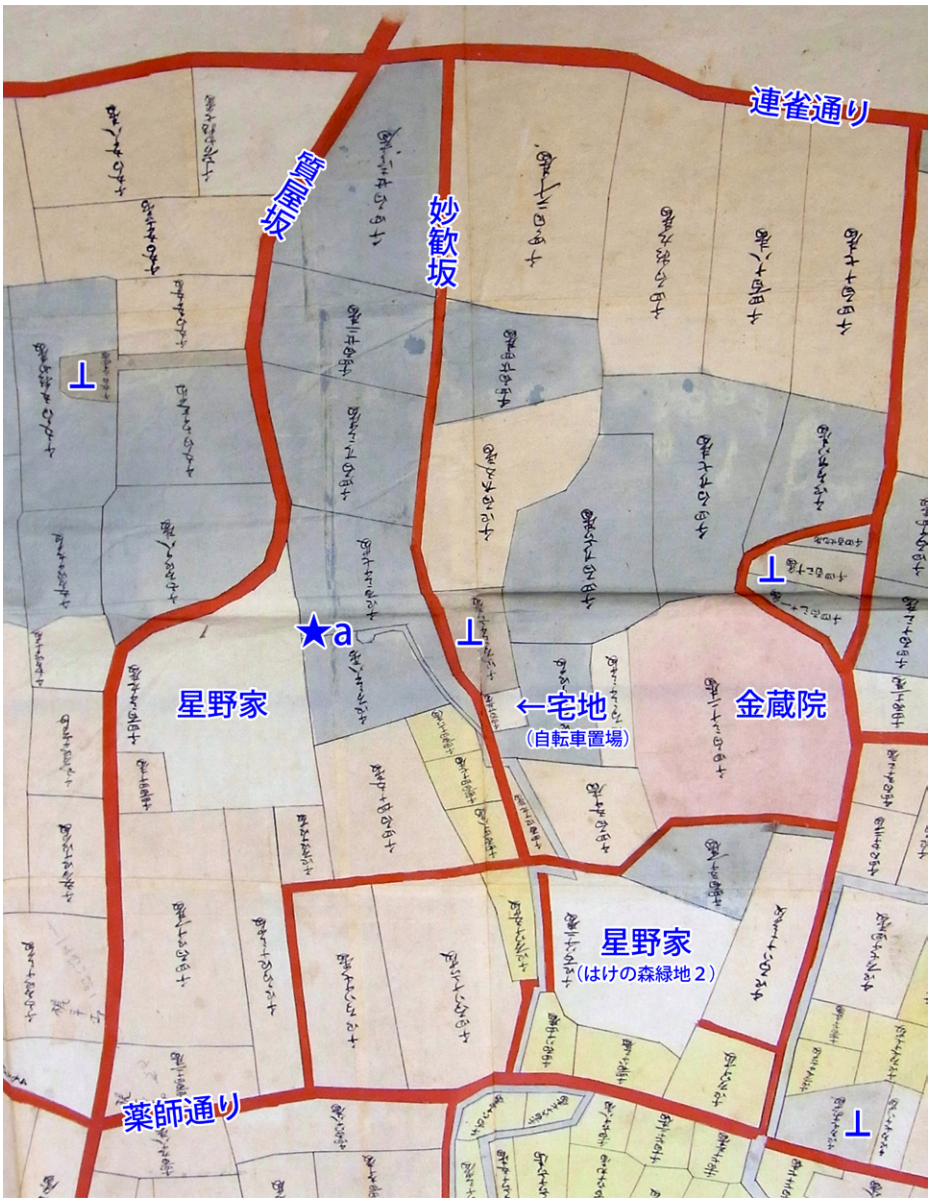



**小金井村絵図（KS569）　宝永５年（1708）以降**
質屋坂の東に質屋の出水らしき湧水が描かれています。元は藍で描かれていたようですが、色あせて褐色になっています。質屋坂通りと薬師通りの交差点にある「廻国石塔」は、現在、はけの森緑地２に移設され小金井市の有形民俗文化財に指定されています。

■ 小金井村全図　明治８年（1875）

小金井最古の測量に基づく地図のひとつ。この地図を見ると質屋の出水は質屋坂の星野家の宅地（1439番）の東から湧出しています。現在の地図と照合して正確な位置を確認したところ、小金井街道の陸橋の下、ちょうど京王バスのバス停「前原坂」の真下でした（★a）。ということは昭和の初めに陸橋を造成した際に、この湧水点は埋め立てられたことになります。ただし陸橋造成後も質屋の出水は途絶えていません。

京王バス「前原坂」バス停
（小金井スカイコーポラス側）



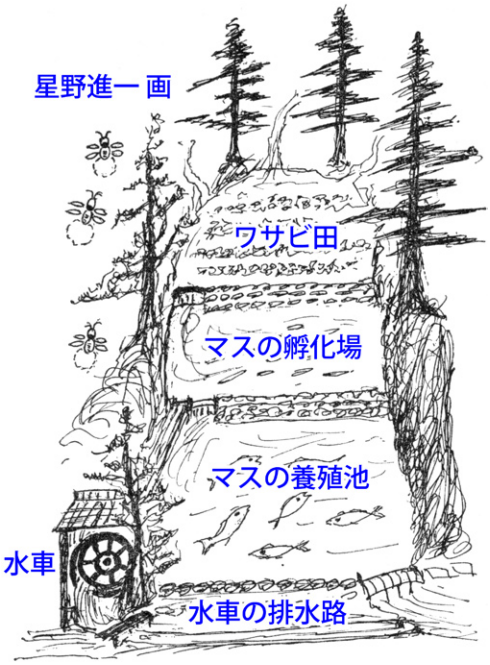

■星野家水車の略図　明治25年（1892）（市139）

星野治右衛門が神奈川県に水車設置を出願した時の添付図面。水車の動力源となる「泉湧出口」は、バス停「前原坂」の真下の湧水点（★a）よりやや北側に描き込まれています。いずれにせよ星野家の宅地の東端まで回し堀を造り水車を稼働させているので、水車を設置した際に流路を伏せ替えたと考えられます。

■ 小金井村全図　大正２年（1913）

質屋の出水は明治８年と同様にバス停「前原坂」の真下の湧水点（★a）から湧出しています。異なる点は1423番をイとロの土地区画に分筆していることです。1423番ロは葵田（ワサビ田）があった場所で、現在地は小金井スカイコーポラスの敷地の北側部分になります。この質屋坂に隣接するワサビ田で、星野家がいつからワサビ栽培を始めたのか曖昧ですが、地図から推測すれば明治８年から大正２年の間になります。星野治衛さんはワサビ田には戦後、クレソンが植えられていたと証言しています。いずれにせよワサビ栽培には新鮮な湧水が必要ですから、地図上に流路の記載はないものの元から1423番に水が湧いていたと考えられます。

ワサビ田があった場所
（小金井スカイコーポラス北側）

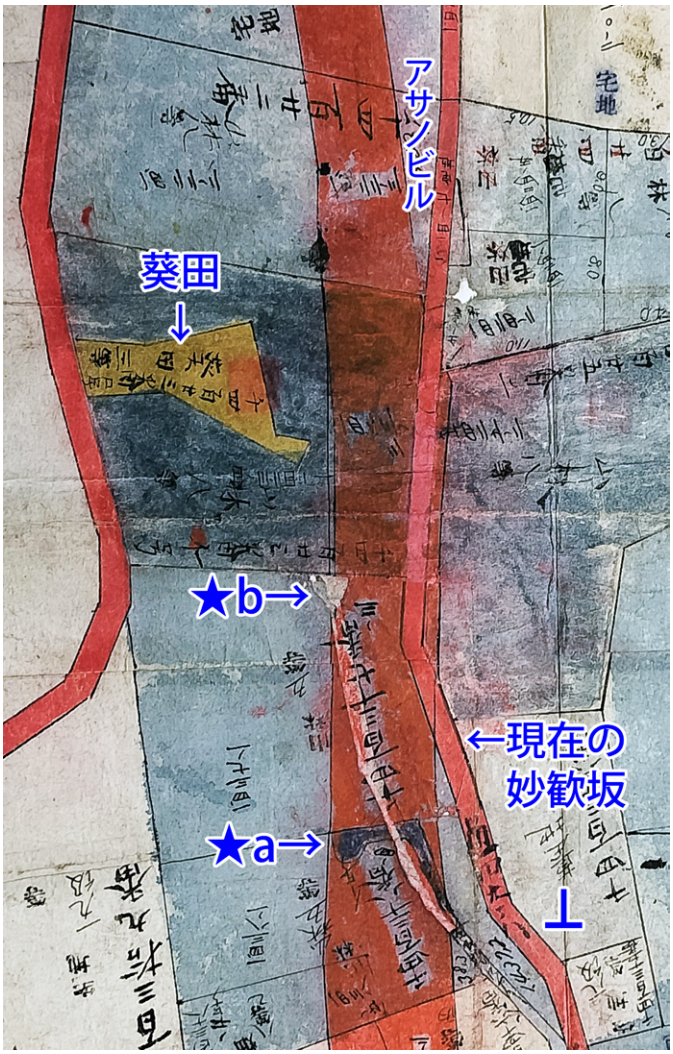



■ マスの養殖池

質屋坂の星野家は南側の隣地を貸していた農林省水産局技師 横山登志丸（よこやま　としまろ）の勧めによりマスの養殖をしています。これは余談ですが昭和29年の第五福竜丸事件当時、横山は日本鰹鮪漁業協同組合連合会・日本鰹鮪漁業者協会（かつおまぐろ）の会長を務めていました。アメリカ側は不当に安い慰謝料を提示しましたが、これに対し横山は外務省に宛てた要望書で賠償金ではなく慰謝料で妥結した日本政府の失態を指摘し、要求額全額の賠償を求めています。星野家がマスの養殖の指導を仰いだ人物が、戦後にビキニ環礁の核実験被害の賠償問題に関与していたわけです。話を元に戻しますが、このマスの養殖池について今のところ詳細な史料は発見されていません。唯一とも言える史料は郷土史家星野進一（ほしの　じえむ）が自らの実見談に、星野治衛さんの父星野治衛武からの聞き書きを交えて書き残したものです。

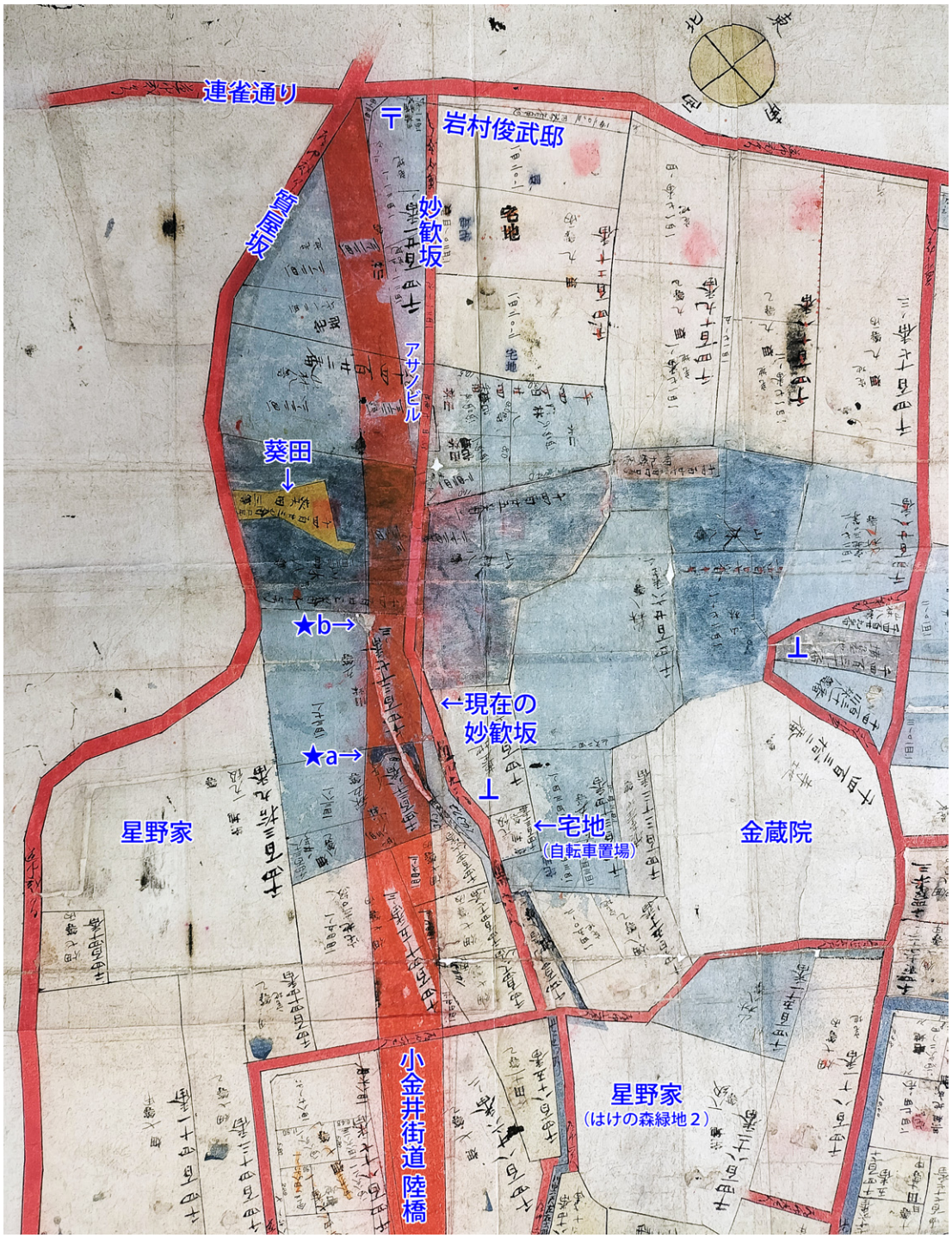
昭和初期、まだ都道が完成されないころの出水山の北側は小高い丘であり、雑木や杉の大木が緑を深めて、湧き出ずる清流のせせらぎは山峡の幽邃を思わせていた。水源は三カ所あったらしく、奥から一段、二段、三段と形づくっており、一番奥の段はワサビ田であり、二段目が鱒の孵化場で、三段目が大きく育った鱒の養殖池であった。
～（中略）～
　いつの年であったか定かではないが、関東一円が暴風雨で河川は氾濫、小金井田圃も水びたしということがあった。質屋の出水山も鉄砲水のために一夜にしてワサビ田は全滅、養殖池も濁流に押し流されて鱒の群れは野川へ逃げてしまった。「精魂こめて努力したワサビも鱒も、それ限りあきらめた」と宮司さんはいう。
　　星野進一『小金井百一話』第一九話　質屋の出水山

　この文章を読んでまず気になるのは「昭和初期、まだ都道が完成されないころ」という記述です。「都道」は小金井街道の陸橋のことでしょうが、その起工式は昭和２年11月23日に小金井村役場で行われ、翌昭和３年に完成しています。大正天皇が崩御したのは大正15年12月25日。この日から昭和元年に改元され12月31日までが昭和元年で、翌年は昭和２年になります。つまり陸橋はほぼ昭和初期から存在しています。『小金井百一話』は副題に「大正時代の思い出」とあるように、明治40年生まれの星野進一が若い頃の思い出を綴ったものです。自筆の挿絵にも陸橋は描かれておらず、おそらくマスの養殖池は大正時代から存在したのではないでしょうか。この文章の長所はワサビの栽培とマスの養殖が同時に終わったことが分かる点です。ただしそれが何時なのかあやふやで、「関東一円が暴風雨で河川は氾濫、小金井田圃も水びたし」になった年としています。これにはかなり悩んだのですが、昭和13年しか思い当たる年がありませんでした。根拠となったのは小金井町役場が昭和13年11月１日に発行した『小金井時事 第一輯』に「六月廿九日前後の豪雨には貫井から大澤までの田圃は湖水と変り植え付けたばかりの苗は流されさうであった。」とあることです。昭和13年までワサビ田やマスの養殖池が存続していたとすると、陸橋造成後もあったことになります。
　もうひとつ気になるのは湧水点を３箇所としていることです。一番奥（北）の湧水点はワサビ田の湧水点で大正２年の小金井村全図と同一でしょう。しかしその南にマスの孵化場と養殖池の２箇所の湧水点があり、造成の際に湧水路の伏せ換えが行われたと考えられます。また挿絵には水車が描かれていますが、明治40年に廃業した後もそのまま残っていたのでしょうか。だとすれば挿絵に描かれている水車の排水路は、明治25年の略図（02頁）にある排水路と同一のものでしょう。



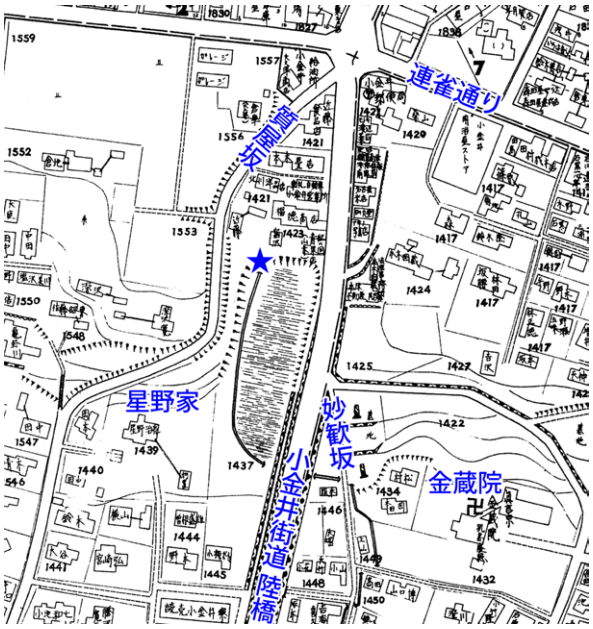

■ 旧公図　字（あざ）西ノ台

　小金井市資産税課が保管してきた旧公図は明治の地租改正時に作成されたものに後代の変遷が重ねて描き加えられており、特定の時代の地理状況を示した普通の地図とは異なります。この旧公図は前原坂上交差点から坂下交差点にくだる陸橋が描き加えられているので、少なくとも昭和の初めまでは使われていたはずです。しかも金蔵院の坂は小金井街道の陸橋に接続していません。陸橋に接続したのは戦後のことなので、この旧公図は戦前まで使われたと考えられます。
　この旧公図で明確に分かるのは妙歓坂の元の状態です。妙歓坂は現在の降り口よりさらに北に延長して、現在のアサノビルの裏を通っていました。妙歓坂の現在の降り口からアサノビルの南側までは陸橋に重なってしまった部分です。ワサビ田は「葵田」として、はっきりと書き込まれています。陸橋がない時代、遮る樹木などがなければ妙歓坂からワサビ田が眺められたのかも知れません。湧水点はバス停「前原坂」の真下の湧水点（★a）が描き込まれていますが、不鮮明ながら白い塗料を使って陸橋に重なった流路を描き換えています。陸橋造成時に流路を伏せ替えたのか、湧水点は北に延長されています（★b）。ここは現在、小金井スカイコーポラス向かい側の陸橋で、そういえば陸橋の側面はいつも湿っています。



アサノビル（中町４―14―11）

現在の妙歓坂




■ 住宅地図　昭和40年（1965）

小金井スカイコーポラスが建設される５年前の住宅地図。流路は１つしか描き込まれていませんが、注目されるのはその湧水点で、ここはワサビ田があった場所です。星野治衛さんによれば戦後、湧水点は南北２箇所あり、北のワサビ田があった湧水点からの流路の方が水量豊富であったと証言しています。

以上、明治から戦後まで経過をたどると、質屋の出水は水車の設置・ワサビ田の開墾・マスの養殖・陸橋の造成により度々改修の手が加えられているが、その湧水点は１箇所ではなく少なくとも２箇所以上あった。元からあった湧水点はバス停「前原坂」の真下の湧水点（★ a）と、小金井スカイコーポラスの敷地の北側部分にあったワサビ田の湧水点と考えられます。

## ・妙歓坂を降って

小金井街道の陸橋が造成される前、前原坂上交差点は「小金井六道の辻」と呼ばれ、武蔵小金井駅開業以前から六地蔵を目印とした馬車や人力車の駅（中継地）でした。小金井六道の辻は三角地を中心に６つの道に分岐する六叉路で、そのうちの２つの道が質屋坂と妙歓坂です。陸橋の工事完成後、前原坂上交差点に小金井最初の郵便局である小金井郵便局が昭和３年10月１日に開局し、その東隣にいつの頃かはっきりしませんが岩村俊武が自宅を構えました。岩村はこの自宅を「有隣荘」と称していたようです。岩村が小金井で最初に住んだのは現在のはけの森美術館の東側の「春水園」、次に越したのは現在の八重垣稲荷神社の東側の「随楽園」、さらにここ「有隣荘」に移り住み生涯を終えています。この岩村邸と郵便局の間には細い道が残っていましたが、これが六道のひとつであった妙歓坂で、連雀通りに接続する北端に当たります。

小金井郵便局の初代局長は本木梅太郎。本木は小金井最初の校長先生として有名ですが、教職を退いたのちは小金井最初の郵便局長を務めています。本木梅太郎と岩村俊武の共通点は、どちらも永井銀治郎（1895 ～ 1940）と交流があったことです。永井が人力車の車夫としての稼ぎをやりくりして生徒のために学用品や日用品を買って梅太郎先生に届けていた話は有名ですが、永井の知名度が全国区で上がったのは岩村が講談社の雑誌『キング』に投稿した「感心な車夫」が始まりです。永井の没後、現在第一小学校校庭にある永井銀治郎頌徳碑が建立されますが、これも岩村の肝いりで愛国婦人会が寄付金を募り建てたものです。郵便局長本木梅太郎と岩村中将は二人して永井の早すぎる死を悼んだかも知れません。

さてさらに妙歓坂を南に降ると、現在も残る妙歓坂の脇には地元星野一族の墓を母体とする墓地があります。ここには妙歓坂の名の由来となった妙歓法尼の墓があり、その没年を文久２年（1862）と刻んでいます。文久２年から13年後の明治８年に作成された小金井村全図（02頁）では、墓地の南隣の土地（1435番）の地目は宅地（白抜きの土地）になっています。ここは現在、中町４丁目第１自転車置場（中町４―13）です。これは筆者の推測ですが、ここはおそらく江戸時代から人が住む土地で、妙歓法尼は墓守として住んでいたと考えています。意外に思われるかもしれませんが、市内に点在する代々の地元住民の墓地に、墓守が住んでいることはさほど珍しいことではありません。貫井共同墓地や緑町共同墓地、桜町病院の西にある鴨下家の墓を母体とする墓地には、戦後になっても墓守が住んでいました。宅地の西側には質屋の出水が流れ、妙歓法尼も生活用水として利用したと想像してもあながち無理はないでしょう。

ここが自転車置場になる前、宅地として最後の所有者は自転車置場の掲示板に書いてあるように紅露昭通氏です。紅露氏は徳島県選出で日本初の女性国会議員となった紅露（こうろ）みつ（1893 ～ 1980）の子孫に当たります。紅露家はこの自転車置場の土地だけではなく、当館の北側にある通称 山の神（緑町３―13―２）と呼ばれる神社の土地などを昭和４年に磯村貞吉（いそむらていきち）家から買っています。磯村は小金井村の近代化に多大な影響を及ぼした人物で、武蔵小金井駅や小金井村役場は磯村の寄付なしでは建設できませんでした。磯村家と紅露家の何らかの関わりが小金井の土地の購入につながったようですが、詳細は今のところ分かっていません。

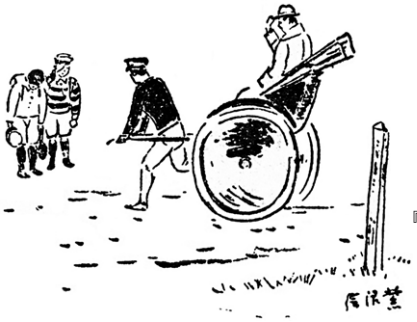
小金井郵便局前を走る馬車
昭和19年（1944）８月23日

小金井郵便局 初代局長
本木梅太郎
（1874 ～ 1956）

文久二戌年
妙歓法尼霊
正月廿五日

妙歓法尼の墓

墓守の住まい　緑町共同墓地（緑町２―５）
昭和30年前後

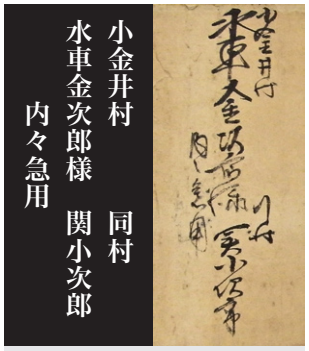


永井銀治郎を描いた挿絵
『キング』昭和15年２月号

自転車置場からさらに南に向かうとはけの森緑地２（中町４―12）があり、ここは小金井で最初の星野家の屋敷といわれる星野宇右衛門家（1482番）がありました。いわば地元星野一族発祥の地で、妙歓坂の墓地にある宇右衛門家の墓は「星野総本家」を名乗っています。宇右衛門家の西側には質屋の出水が流れ、ここでも生活用水として利用されたのでしょう。この妙歓坂の宇右衛門家からいつ頃誰が質屋坂に進出して初代治右衛門となったのか判然とはしませんが、遅くとも文政12年（1829）の『下小金井村丑宗門人別改帳』（H22）には、治右衛門家と宇右衛門家が並んで記載されています。

明治になると宇右衛門家の当主は「水車宇右衛門」と呼ばれ、どうやら農間稼ぎとして水車で麺粉を製造していたようです。水車といえば宇右衛門家を相続した星野金次郎（大正２年没）が有名で、小金井小次郎が「水車金次郎」と呼ぶほど水車経営に愛着を持った人物です。はじめは小次郎の妻関ノエが所有する水車、その後は小川村の水車を借りて営業していたようです。自分の水車を持ちたいという思いは強く、念願かなって現在の本町４―21―18に小金井分水から取水する水車を設置、明治35年に完成しています。金次郎の没後、水車経営は次男の星野儀三郎（昭和13年没）が受け継ぎましたが、中川家に貸したのち大正時代に廃業しています。なお儀三郎は大正２年から11年まで自転車置場の土地（1435番）を所有しており、それを磯村家に売却しています。

星野総本家の墓




小金井小次郎（関小次郎）が星野金次郎に宛てた手紙
明治３年頃

『三多摩公論』第２号
大正４年（1915）

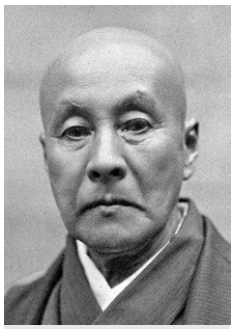
「貧困者無料診療」をうたう
星野歯科医院の広告
大正４年（1915）

金次郎の跡を継ぐはずだった長男の星野孝太郎（明治27年没）は早逝しています。孝太郎は明治23年に本木梅太郎と一緒に受洗してクリスチャンになっています。孝太郎は本木と同じく学校教員で、当時の先生は地域を代表する進歩的知識人です。解禁されたばかりのキリスト教に抵抗があった時代に、若い二人は時代に先駆けて文明開化の新知識を吸収しようとしていたのでしょう。

金次郎の三男の星野清一（昭和28年没）は府中高安寺付近（片町２―１）に転出して星野歯科医院を開業、歯科医のかたわら大正４年に『三多摩公論』を発刊しています。『三多摩公論』は大正デモクラシーの空気をそのままに反映した政治記事を中心とした雑誌です。小金井では青年団が大正12年に前原公会堂や貫井プールを建設して大正デモクラシーが具現化しますが、『三多摩公論』はその先駆となる内容といえるでしょう。この清一が府中に引っ越したことをきっかけに、宇右衛門家の中枢は府中に移って行ったようです。

小金井村絵図　明治２年（1869）
質屋坂を降ると星野治右衛門家、妙歓坂を降ると星野宇右衛門家があります。白抜きの土地は除地（免税地）。金蔵院境内にある「イナリ」は星野家が開いた稲荷（開星稲荷）。

ここまで星野宇右衛門家の近代の歩みを駆け足で見てきましたが、明治時代にトピックともいえる出来事があります。それは宇右衛門家と近年急速に評価が高まっている維新の洋画家 川村清雄との関わりです。江戸幕府御庭番の家系に生まれた川村は大久保一翁や勝海舟の推薦により明治初期に渡欧して油絵を学びます。帰国後は模倣に流れる明治の洋画壇とは距離を置きながら、単なる和洋折衷ではない日本画の伝統的手法を生かした油絵を生涯探求しています。この川村が二度目に迎えた妻が宇右衛門家の出である可能性が、明治39年に雑誌発表された『悲惨なる画家の半生　柳浪が「絵師の恋」の実話』に見えます。川村の談話を元に書かれたとされるこの一文を要約すると、最初の結婚に失敗して「ひとりで弱って居る所」に「小金井の百姓が書生」に来ていた。書生の実家は「元の庄屋か何か大身代の人」で、娘が「日本銀行の吉原さんへ行儀見習に勤めて居る」。川村は縁談のため「ガタクリ馬車で先方」に行ったとあります。全体に曖昧模糊とした内容で、「日本銀行の吉原さん」は日銀初代総裁 吉原重俊（1845～1887）のようです。より確かな川村家と宇右衛門家の関わりについては江戸東京博物館の学芸員 落合則子氏が、川村清雄の父 川村帰元（1824～1912）の日記の研究論文で言及しています。



川村清雄
（1852～1934）
『維新の洋画家 川村清雄』より

祥山良雲大姉（星野老婆）の墓

住宅地図
昭和33年（1958）

日記中に、明治十二年五月二十五日「星野老婆」が小金井で亡くなったという記事がある。帰元はその前に星野家を見舞い、訃報を聞くと小金井までわざわざ弔問に出掛けた。星野家からは、形見の品が贈られた。このことから、彼女はかつて川村家に仕えた女性であったと想像される。小金井市内にある星野家墓所には、下小金井新田の名主を務めていた星野宇右衛門夫妻の墓石があり、宇右衛門の妻と思われる「祥山良雲信女」の命日が明治十二年五月二十五日と刻まれている。この人が「星野老婆」であることは間違いないであろう。

落合則子『明治十年代　川村家の家計日記
―「川村清雄関係資料」から―』

文中の「星野家墓所」は妙歓坂の墓地のこと。また「祥山良雲信女」は正しくは「祥山良雲大姉」で、夫の「覺山慧良居士」とひとつの墓に葬られており、この星野宇右衛門夫妻の息子が星野金次郎です。つまり、金次郎の母が川村家に仕えていたのであり、川村清雄の二度目の結婚以前に川村家と宇右衛門家に繋がりがあったことが分かります。現段階では両家は姻戚関係もしくはそれに準ずる密接な関係にあったと考えられます。

宇右衛門家がはけの森緑地２の土地を去ったのち、ここには井上鋼太郎（いのうえ こうたろう）・万寿蔵（ますぞう）（1900～1977）父子が住み着いています。井上万寿蔵がこの土地を取得したのは大正10年。万寿蔵は鉄道省に勤めるかたわら鉄道・観光・エスペラント関係の著作があり、昭和33年には交通博物館の館長に就任しています。はけの森緑地２がある場所に東鉄管理局小金井職員集会所があったことを記憶されている方もいるでしょうが、それは井上万寿蔵がこの土地を昭和31年に国鉄に売却したからです。井上家には森村学園に勤務していた井上昇三という人物もいますが、彼は戦後の小金井町の文化活動の一翼を担った早胡桃会（さくるみかい）で活動しています。早胡桃会には画家中村研一（1895～1967）も関わっていますが、万寿蔵や昇三が中村研一宅（現 はけの森美術館）を訪問したり、中村研一が井上家を訪れることもありました。

以上、妙歓坂を小金井六道の辻から薬師通りに接続する地点まで降って、その歴史を探ってみました。質屋の出水は生活の基盤である水の恩恵を湧水源の治右衛門家だけではなく、妙歓法尼や宇右衛門家にも、もたらしていたのでしょう。

【以下、次号に続く】

小金井市文化財センター通信 No.4
**小金井の湧水点 part 4**
文／構成　多田 哲（学芸員）
令和６年３月31日 発行

**小金井市文化財センター**
（旧 浴恩館）
小金井市緑町３－２－37
（浴恩館公園内）
☎ 042-383-1198